

## ■特集：研究プロジェクト：研究グループ紹介

## 文化意識の変容と開発

## 研究グループ代表

廣瀬晋也（鹿児島大学法文学部）

本研究班は、日本文学、方言学、文化人類学、中国書誌学を専門とする4人の研究者より構成され、奄美諸島を中心とした南西諸島における文化意識の変容と開発について調査研究を行う。

廣瀬はこれまで鹿児島関連の近代文学情報・資料の収集、および分析を進めてきた。近代文学諸ジャンルの作品を対象として、単行本刊行後、あるいは雑誌等に発表後埋もれた作品を掘り起こし、その再評価と文学史的位置づけを試み、さらにそれら作品の地域的特色を検討するという作業である。とりわけ奄美諸島関連作品は、固有の風土、歴史、習慣ほかを作品世界の枠組みとしている点で地域性が豊かであり、文学表現としての地方・地域性の構造化の試みが見られる。

今後は、島尾敏雄の南島論資料のうち奄美諸島関連のものについての調査を行う予定である。島尾敏雄は1955年の奄美移住以降、奄美、沖縄ほかの南西諸島圏域に関する評論、随筆、紀行文、講演（録）を多く記している。これらは新聞、雑誌ほかに発表後、島尾の著書『離島の幸福・離島の不幸』（1960年）、『島にて』（1966年）、『琉球弧の視点から』（1969年）、『南島通信』（1976年）などに収録された。島尾の南島エッセイの内容は島嶼圏の歴史、文化、自然、風土、言語、生活、民間信仰と多岐にわたっており、歴史学や民俗学、地政学の知見を取り込んだ文明論を展開している。島尾の南島エッセイにおける、南島文化の独自性と多様性の考察や琉球弧から「ヤポネシア」へと拡がる視点と問題提起については、すでに近代文学ならびに隣接諸分野の研究者による検討と評価がなされている。

島尾の南島エッセイのうち、「南海日日新聞」「奄美新報」「南日本新聞」「大島新聞」など地元紙に掲載されたものを主たる調査対象にする。地域に密着し、「島

の生活のなかで拡がり深められた島尾の南島論は、新聞、雑誌などの媒体を通して地域へと発信され、また地域の反応は島尾に受信されたわけであるが、その過程を検討することになる。（日本文学：廣瀬晋也）

奄美方言は琉球方言文化圏の北端に位置し、ある面で琉球方言の古態を残す。その意味で、方言研究の分野では早くから注目されていた。しかし、日本はその後、戦時体制に入り、終戦後もアメリカ軍占領のため、調査もままならない状態がしばらく続いた。復帰後はすぐに言語学、地理学、歴史学などによる九学会連合の調査団が奄美を訪れ、調査報告書『奄美—自然と文化—』を刊行した。その後、調査がかなり行われるようになり、木部も1988年、1991年、1995年の三回にわたり、奄美大島方言の調査を実施した。

しかし、九学会の『奄美—自然と文化—』を初めとするこれらの研究報告の多くは、専門家を対象としたもので、方言語形の表記にIPA（世界音声記号）が使用されている。そのため、必ずしも地域の人たちにとって分かりやすいものになってはいない。奄美方言は複雑な音声特徴を持ち、既存の仮名文字では表記しきれないから、IPA表記を使用するのも仕方のないことかもしれないが、しかし、そのために一般の人にとっつきにくいものになっているとすれば、報告書のあり方自体を大きく考え直さなければならない。

一方で、地元の人の手になる仮名表記の方言集も多数出ているが、これらの仮名表記は著者によってその方法がさまざまに異なる。

木部は2003年10月、名瀬市の公開講座で講師を勤めたが、その際にも奄美方言をどのように文字表記すればよいかという質問を多く受けた。このような実情

を受けて、本プロジェクトでは、地元の人たちの協力を得て、奄美方言の音声録音と分かりやすい方法による記述、および奄美方言による言語コーパスの作成を行っていききたい。(方言学・木部暢子)

桑原はこれまで、喜界島と奄美大島で短期の調査研究に従事し、その成果として『薩南諸島・21世紀への挑戦・』(鹿児島大学多島圏研究センター、2001)で、「東洋のガラパゴス奄美大島」と「農業に未来を託す島喜界島」の部分を担当した。奄美諸島は、これまで人類学者や民俗学者にとっては伝統文化の宝庫であり、内外の多くの研究者を魅了してきた。組織的な調査研究としては、昭和30年代と50年代の2回にわたって九学会連合による奄美調査研究プロジェクトがあり、多くの研究者が来島し、奄美諸島各地を調査した。また、外国の人類学者による研究としては、奄美が米軍政下にあった1951年に米国ニューヨーク州のシラキューズ大学の人類学者ダグラス・ハリング教授が来島し、短期の調査を行った。また、1960年代には、ドイツの人類学者ヨーゼフ・クライナー教授が加計呂摩島でノロ祭祀について調査を行っている。本土復帰後は、まだ海外での現地調査が一般的になる前に、多くの人類学者が奄美諸島に来島し、親族調査やノロ、ユタ等の宗教祭祀に関する調査研究を行い、ハロージやヒキといった親族用語の解釈をめぐる全国的な学問的論議を呼び起こした。奄美の伝統文化の豊かさを示す一つの指標として、これまでどのような研究者がいつ、どこで、どのような調査をどのくらい行い、どのような研究成果を残しているかという事実があり、このような過去の調査研究の詳細な目録を作ることによって、奄美諸島の伝統や文化の豊かさを可視化することができよう。また、調査研究内容の変遷を奄美の開発の歴史的な文脈で見えていくことによって、奄美における文化意識の変容と開発との関連性を知る手がかりを得ることができる。本研究は、戦後の50年の奄美の文化意識の変容を、人類学や民俗学の調査研究のデータベース化を通して探り、

同時に、奄美の伝統文化の資産目録の作成を意図している。(文化人類学・桑原季雄)

高津は過去10年間、沖縄県における漢籍調査に従事し、1994年には、途中経過の報告書として『琉球列島宗教関係資料漢籍調査目録』(榕樹社、1994年)を刊行した。これまでの主要な調査地域は、沖縄本島、石垣島、久米島、本土の図書館で、沖縄本島に関しては、太平洋戦争末期の激戦により多くの資料が焼失したため、内地に疎開、避難したために残った資料、琉球処分以降、内地に流出した資料、沖縄研究者が収集した資料を中心に調査を行い、八重山資料に関しては、琉球大学及び八重山博物館が所蔵する資料を調査し、久米島に関しては久米島自然文化センターに保存された上江洲家資料、與世永家資料を調査してきた。琉球王国時代の漢籍文化の特徴は、久米村を含む王府関係者の中国で出版された漢籍を中心とした書物の収集と、地域士族を中心とする和刻本漢籍(やまとで出版された漢籍)の2系統に分化することである。明朝移民の子孫(久米村人)、福建・北京への留学生(官生)たちは、中国語を話し、清朝で出版された書物に基づき学問を研鑽していた。一方、地域の士族は、沖縄方言を話し、和刻本漢籍によって、訓読という方法を用いて漢籍文化に接していた。奄美の士族においてもおそらく同様の状況であったと推定される。また、王国時代には、中国南方地域に由来する風水という世界認識の在り方が広く行われており、風水書関係の漢籍の収集も行われていたことは、これまでの沖縄本島等の調査で明らかにされている。今後の課題として、奄美においては、風水、日選び等が如何なる漢籍を参照して行われていたかという問題が残されている。今回、同じ琉球文化圏に有りながら、現在のところ未調査である奄美地区の漢籍について調査を行う予定であるが、漢籍資料の存在の有無についての情報に乏しく、地元関係者の方々の協力が得られればと期待している。(中国書誌学・高津孝)